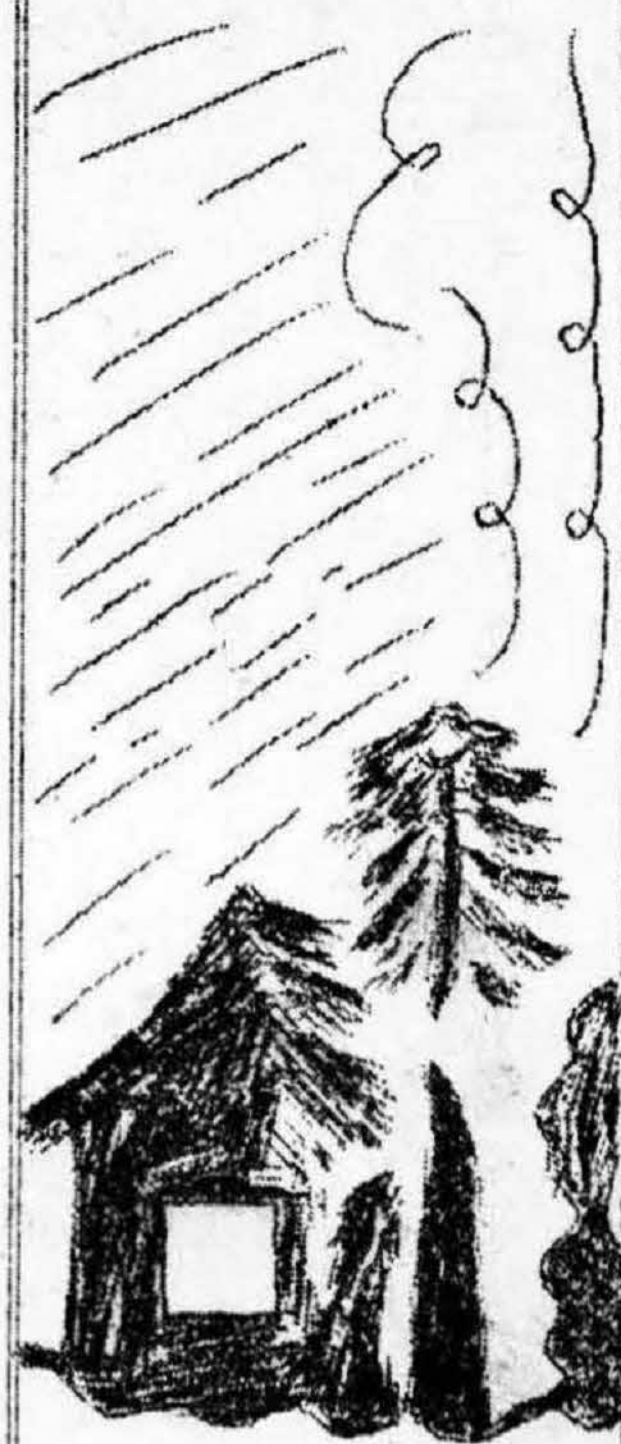


會報



昭和九年一月十六日発行

第五年第一号

富士の冬

十二月の或夜、富士の五合目の、佐重の小舎に泊った、小舎はすく／＼と生茂って居る針葉樹林の中にあるのだが、頂上から吹下ろす風は、梢から梢へと荒狂って、小舎の中に居てさへも、其はげしさに明日の天気が気になるので小舎の外へ出る、空は良く晴れて黒い色を湛へ、星が梢の上にまばたいて居る、凄さまじい勢で又風が小舎に、人間に、ときの聲をあげて襲ひかゝって来る、下界でも風に寒さに戦いて居るか、吉田の町の、真直ぐな細長い灯しが、ふるへて見える。

今はなき人の百ヶ日のお暮参りをすませると、あの世から誘はれた様な怪しげの興奮に、居た、まれなくなつて、山の道具を手早くリユークサツクに詰め込み一人を飛び出したのもつひ昨日の事だった、斯うして星と灯のまばたく大自然の山

通巻三十二号

小舎にあつて思ひ出した様に鳴渡る風の音を聞く、明日からの新しい自然との争闘に、思はず緊張する、心をおさへて小舎の中へ入る、月でも上るのが東の空が明るくなった、然し此の風では明日の天気はどう変わるかしら、何から何まで、其れこそ空気までも心まで凍てついて固く身動きの出来ない天地が、樹々の聲に、漸く解けんばかりの風情がほのかに見える、静かな山の朝だった、佐重に送られて友と二人五合目の小舎を出る、昨日山から下って来た一橋山岳部の人達に、二合目で逢つた時はなつかしかった、其一人の山の友は單身登って来た私のために、一緒に引返して、富士の嶺へ行くと云ふ、この山の友の心に何ともし口では云ひ様の無い感謝と喜びに打たれる、友は二日に渡る劇しい労働も、若さの故か今はすっかり忘れてしまった如く、アイゼンの音を、夏道の凍った雪の中にきし／＼と残して、先きに立って元気よく登って行く、道端の樹の中から栗鼠が顔を出して逃げようとせず二人の異様の姿に驚いて居る、行手に待つ未知の世界も、少しも不安には感ぜられず唯楽しげなる幸福な存在に感ぜられた。

富士の裾を取巻く森林地帯は、此の若田口では五合目を少し過ぎると全く終つて、頂からの一直線に続く白い大沢の斜面が見上げられる。道は大沢の左をザツクザツクして所々には鎖まで出て居る微かに夏道らしき所をたよりとして岩石の出で居る雪の上を所かまわず勝手に登って行く。朝まだきぞよいで居た風は登るに連れて益々なくなり、あたりの山も一歩／＼登るに連れ、すっかり晴れ渡つて一点の雲さへもない青空の中にびよこんびよこん白い姿を現して来る。立止つて後を見ると三ツ峠の後には秩父、上越の山々が黒く白く重なり合つて見える。浅間の煙は真直ぐに上つて、途中から急に東に靡びる。左手には雪のハケ岳山塊、駒ヶ岳、が播居し、後景には北アルプスの長大な白屏風が剣から、槍穂高、乗鞍と突立つて見える。壮大な眺望だ、唯此のまゝぢつと動かずに何時までも何時までも此の眺めに見入つて居たい気持ちになる。

八合目の雪に埋もれた岩小舎は、誰か前に登つた人達が、一時間も二時間も身動きも出来ない吹雪にでも襲はれたか、人間一人入れる位の小舎の屋根板がはがされて、中は雪でいっぱいだ、友が昨日、強風に吹かれながら、ザイルを使って登つた

大沢の西側の屏風岩の涯も丁度八合目の小舎から真近く黒い岩膚を見せて居る。今日は此んなに恵まれて、何一つさへぎるものもない眺めと、無風の、富士の心からなる笑顔の接待を満喫して居るが、一度山が怒ると、七合目から八合目の急傾斜面に、嶺の方から雪煙が立ってどつと吹き下ろす突風に、突嗟にピツケルを凍つた雪面に打込み、パット身を伏せる。間断なき富士の得意の強風に、あとは一歩／＼ステップを切らなければ登れぬ程に激変する。七合から上は中々の急傾斜で、八合目で須走口の尾根に取つき、手の届く様な頂上の島居も、氣ばかりあせつても中々届かず随分長くいらたゞしく感ぜられた。其でも頂上へ着いたのは小舎から四時間のアルバートの後だった。

お午近き、暖い小春日和の静な晝に頂上に立つて、すっかり雪をかぶった剣ヶ峯などの外輪山に囲まれた赤黒い岩肌の巨大な噴火口を覗き込む。晝食は頂上の観測所の前の雪の上で取る、風は全く無く、——唯僅に観測所の屋根の上の風速計が、のんびり廻つて居るのでやつと風の存在を科学的には秒速二米と証明されたのだが——餘り雪の反射で暑いので終ひに裸になった、此の裸の寫眞を、普通の人は想像もつかない事だらうし、又事実十

二月の富士で、裸で居られるなどと云ふ機會は、殆んどあるものではない、さうゆう絶好の好機會に恵まれた私達は、唯黙って眼下に箱根山塊、夢の様な伊豆の半島、知多半島まで延々と続く海岸線に見入って居る、観測所の中からは電気を起すモーターの響きに交って微かに音楽の音が聞えて来る。ラジオか、蓄音器か長閑な風景……。まるで映画モンブランの様だと友が云ふ。

観測所には四、五人の人達が冬籠りして居るらしいが、此の人達は冬の登山者達に對してさへも會ふ事も話することゝ喜ばぬと云ふ事を豫てから聞知って居たので一寸挨拶しただけ彼等の小さい世界の夢を破らぬ様にそつと表へ出た、そして時間も早いことゝ、銀ぶらでもするが如く、急に重く感ぜられる足を引きずって噴火口の廻りをよたよたとお鉢めぐりする。剣ヶ峯に立った時、素晴らしい南アルプスの眺望に驚かされる、北岳、間の岳、農鳥、塩見、荒川、悪沢、赤石、聖、と一万尺前後の白い嶺が、青き虚空に嘯いて居る、全く日本一の眺望である。凡そ富士を望み得る所は反對に全部此の頂きから見えるのであるから其の雄大、廣大さは筆舌には云ひ現はせないものである。

のんびりしたお鉢めぐりをすませて三時近く、いよいよ下山の途につく、長大な大沢の雪溪も凍り始め、既に氷の様にカチ／＼になった雪面も、アイゼンをはいた登山靴の重みに其表面が破れる程度に凍った雪面もあって、最初は注意深く一歩一歩歩いて下る、去年の十月某氏が墜死した断涯も、気味悪く後ろへ遠ざかつて行く、途中からアイゼンを抜いて五合目の上までグリセードして降り始めたが其の長い串膝頭が痛くなる程滑りに滑った。

其夜は再び五合目の小舎に泊った、夜までも風一つ出ない静な山中に十八夜か赤い大きな月が樹立の間から昇って来る、囲炉裏の赤い焚火を見つめながら、猿が鉄砲で猿を打ったなどぼつり／＼語り出す、佐重の物語りを聞いて居る中に何時しか眠むくなくなった。

富士山吉田口にも今年から新しいスキー場が出来た、夏道の西の尾根を馬返から五合目まで切開いたもので雪質は東京に近い割に、高度があるため良さそうだが、三尺積ったら森林の中を面白く滑れるだらう。

(一九三三十一月一日、北海道十勝行の軍中にて) (手塚)

奥武藏スキー場検分

要するに猶の顔である。北向の斜面だから吹きさらしではあるが雪質は相當良いが何しろ東西約四丁、南北約二丁の長方形のゲレンデで其二丁の方が岩原に劣らぬ緩傾斜だから到底話にならぬ。まあ妙高の大天井スロープと思へばいい。ノロノロ直滑降でも三十秒とは保つまい。三百人も集ったら夕方の銭湯以上の混雑だらう。「両神山、武甲山に計峙し展望絶佳」とポスターにはあるが。それはゲレンデから六、七十米も登った刈場坂峠から両神の頭がチヨッピリ見えるのを客引廣告風に書いたので、武甲山なんて、てんで見えやしな。い。況んや低いゲレンデからは両神も、武甲も見えない。むしろ関東平野の素張らしい展望と男体を中心とする白銀の日光連山の遠望の方が廣告には無いがよほど絶佳である。

X X X X

武蔵野電車がしきりに宣傳してゐるから、五行のトレイニングのつもりで十七日の日曜に検分に出かけたのである。無論スキーは持たないで。吾野の終点で電車を降りてバスに乗り換える（秩父大宮を展げてくれ給え）此バスが畑井まで行く。へ十二月廿五日からは吾野から大蔵平まで三十分

毎に発車するやうになるさうだ。正丸といふ部落から真北にダラ／＼登りになるが、旧道を行つてもいいし、それと併行して右手の山腹に開かれた「農村振興道路改修工事」の新道を行つてもいい。ものゝ二十分も進むと愈々瓜先登りとなつてくる。此辺で積雪量に関する土民測量を試みると、一尺降ることとは珍らしいといふから南向の此道ではスキーは先づ駄目である。約四十分行くと地図の神社の符号の辺である。此辺から道は杉の植林の中に入り込む。成程宣傳する丈あつて山手の方の沢には寛をかけ、其傍には涼台の様な青竹表のベンチが人待ち顔に置いてある。だが、此植林地内の木の下落たるや、晝尚薄暗い上に前晚雨が降つたせいでもあらうが、最近路普請をした、めに却つて上土が「ぬかるみ」になつて、登りには足をとられ、降りには泥グリセードもしかねまじき難路となつてゐる。そして愈々急な箇所には青竹の「てすり」付の柵が出来てゐるし小橋は全部架換え、又も青竹の「てすり」付である。イヤハヤ実に至れり盡せりではあるが、此徑をスキーを攜いで登つたらと考へるとゾツとする、まして暗くなつての帰途、こんな所を滑つて降りたら柵か植林に引かけてスキーを折ること必定だ、こんな憂鬱

な登りを三十分も続けると稍平になって林が出る。それから十分許で刈場坂峠だ。地図に八七九米の三角点のあるすぐ西の無名の峠である。こゝに小屋を新築するらしく地均しもしてあるし、薪の用意も出来てゐる。正丸から約一時間半だ。殆んど空身でさへ、二三度汗をふき乍ら一時間半もかゝってやっと八八〇米である。況んやそこから北に見下したゲレンデなるものが先刻御紹介した代物で、峠からジグザグを三四度繰返して其猫の額の入口になってパツと開く。恰度胃袋の様な形のゲレンデと思へばいい。其食道へ続く所が最高所で次第に脇の方へユル／＼と降ってゆくと骨組ばかりの小屋がある。二十五日迄に間に合せようと仕上の最中だ。之と小沢一つ隔て、向側の南向の斜面も、大分敷を刈つてゐる所から推すと即ち第二ゲレンデなるものを拵へるのたうが、真南向だからどうかと思ふ。直滑降約二分と診察する。此外にはスキーを走らすに足る所は更がない。地図には此辺一帯草地の様を書いてあるが現地は相當の敷で急斜面が多いから、三尺や四尺の雪では敷スキーの名手になるばかりだ。つまり、行つたが最後、猫の顔で順番でも待って滑るより仕方があるまいと見たは僻目か。

まあ話の種に武蔵スキー場を「観やう」といふ人は行き給へ。だが「滑らう」と思ふ人は「往復、バス共一円九十銭」に釣られてはならない。もう二三円奮発すれば雪もタントあつてしかも敷のない所は沢山ある。どうしても調達できなければ大雪になるまで待つて代々木へ行つた方がよっぽとましだ。といふ僕は電車とバスの両方に利く「バス」で観てきたのです。

(浩一郎)

追記、此猫の顔で二人も滑つてゐたには驚いた。尚呆れたことには、帰途、三時半頃泥グリセードを終つた処で、真新しい大小のスキー二台を人夫に擔がせた「スキーヤー」に「雪はありますか」ときかれたから「猫の顔の毛が見えます」と答へた。

滞歐中の磯野君より十一月二十九日付の手紙最近到着致しました、左に掲載致します。

拜啓、先日は針葉樹會報有難く拜読、大変御無沙汰した為會報に搜索廣告が出て居るのを見て恐縮して居ります。スコットランドの北の方を歩いて居りました。霧と傳説に満ちた荒野をふら／＼

と歩き廻りました、祗服された人々の持つ暗い過去と、人を寄付けない陰險な目なぞしが胸を打ちます。

学校の連中が此の夏はなか／＼よく活躍して居られるので誠に頼もしく思ひました。堀岡君の外は皆知らない名前ばかりですがその内容が充実して居るのと如何にもよくがんばって居るのが見て驚き且喜んで居ります。今迄の商大の上高地生活へ此の言葉は大嫌ひなれど仕方がないの、内最も充実したもの云へませう。折角御自重の上冬期の活躍を蔭ながら祈って居ります。明後日此処を引上げて London へ参り松方氏に遇ひます。

Alpine Club の Annual Dinner へ連れて行つてくれるとの事です。久し振りに言葉に不自由なく仲間の悪口も言へると云ふ訳。一月は Jommernberg, Grindelwald に居ります。

小川 岳兄

(雲)

猶、磯野君は三月中旬マルセーユ出帆の照国丸で帰国する相です。其れ迄はグリーンデルワルド滞在との事です。

岩澤一郎氏よりの昨年末頃の手紙を載せて見ます。氏の近況が窺はれて好伯のものでせう。

小川 竹夫兄

其の後は御無沙汰して居ります相変わらず元気な様ですね。新東株は如何ですか、矢張り上ったり下ったりしてゐるだけなんですかね、東京の連中は関西よりも實質上元氣があるらしいですね、関西は皆コブつきですから大それた山登りなんか何処かへ行つて了ひましたよ。元氣だけはあるんですが山やスキーに出かける熱がやむを得ず減つて了ひました。スリユーのお蔭ですね。

「六甲山」の五万の地形模型が出来上りました三ヶ月かゝりましたが大した出来栄えではありません。いづれ神商大の田中さんに見て貰つて点数をつけて戴きませう。五十点とれ、はい、方かと思ひます。次は氣の向いた時分に「上高地」でも造つて見やうと考へてゐます。矢張りあゝいふ地形模型は変化の多い方がいゝ様です。

次は五、六年前ボクチンから手ほどきを受けたラジオを又再燃させて目下鋭意研究中です、此の所ラジオの本がズラリと並んでゐますよ。山の本の方はゴミダラケです、近頃はメントードだとかバリミユーとか色々新しい球が出来てゐてラジオも随分面白いです。エリミネーターの研究、負荷容量だとかリレー、ジカールメントだとかオームの

法則が直流と交流とでは大変違ふ事だとかまるで予料一年の時の復習みたいな事をやっております。つしーングの右手だとか左手の法則って奴を覚えてゐますかね。道楽でやり出すとあんな面倒な事でも面白くなつて来ますよ、随分勝手な話ですが、今度はこんな事で報告終りとしませう。

(吉澤)

十勝岳と無意根山

日頃実直に勤めたおかげで十日ばかり休みをとる事が出来たので北海道に出掛た。行程は

十二月二十八日 上野発

二十九日 小樽泊

三十日 小樽―上富良野―吹上温泉

附近勝岳荘

三十一日 一日、二日、吹雪

三日 曇後晴、十勝岳登山、勝岳荘―

上富良野―小樽

四日 小樽―札幌―定山溪

五日 晴 定山溪―奥無意根小屋

六日 晴後雪 奥無意根小屋―無意根山

附近―奥無意根小屋―定山溪

札幌 夜行帰京

一行は奥野、手塚、十合、堀岡、宮川、小生の六人で十勝行には堀岡の弟進君、奥野氏の友人二人、無意根行には芳賀スキー氏が参加し可成の大世帯であつた。

十勝岳では三十日の晩に望に近い日光を浴びて勝岳荘に着いた時には天気は好し雪は好しすっきり喜んでしまつて手塚の如き單身銀光を浴びてスキーを享樂した始末であつたが、三十一日から二日迄は連日吹雪で、三股山の下の森林や泥流スロ―プ等でスキーを樂しむ以外の事は出来なかつた。三日も朝の中は天気は悪かつたけれど、その内に登山には差支ない程度になつてきたので九時頃から十勝岳に登つて、午後から小樽へ歸つた。

無意根山では、十勝岳にある間札幌近傍は晴れてゐたその天気が崩れかゝる時で、下界は晴れて山頂は吹雪、眺望もきかず雪質もあまり良からず、タンネの森と藪の中をガサ／＼滑つて歩いた。六日の午すぎに無意根山の森林の盡きる所で一行と別れて一路東京へ歸つた。

詳細は次号に麗筆を振ふにもあるべく、その邪魔をせぬ程に筆を措く。奥野氏得意の張付アザラシ失敗の巻、薄からぬ宮川のツラの皮凍場にかゝるの記、手塚毎日十数時間眠る話、堀岡汽車の食

堂で五人前をペロリと平げるの一件、十合札幌で混血女子を追駆る等々、近日催される富士山麓の新年宴會の話題豊富なるべきを豫告して置かう。

(増山清太郎)

針葉樹會例會だより

十一月十日 如水會館 (出席者) 中川、矢作、松木、

近藤、増山、手塚、鈴木、小川、久保田、勝田以上會員、

十合、堀岡、宮川、林、大野、鷹野、望月以上学生、

十一月十八日、如水會館 奥野綱重氏上京歓迎

會なり。當夜、北海道のスキー屋芳賀氏来館、

スキーの實質的な價值乃至は商品的な價值に

就て相當のウチクを紹介された。(出席者)

奥野、松木、近藤、手塚、森竹、村尾、増山、曾田、鈴木、小川、

以上會員、堀岡、林以上学生、末廣、芳賀氏、

十二月七日 如水會館 高瀬、園山、西氏除隊記念

會 (出席者)、高瀬、園山、近藤、中川、松木、矢作、草

川、丸茂、金田、久保田、小川以上會員、十合、小橋、宮

川、中島、林、湯田坂以上学生。猶湯田坂君は新入

部員なり。

住所變更

関守三郎 杉並区馬橋二ノ二三四

小川竹夫 杉並区高円寺六ノ六八六

X X X X

御挨拶

此度小生儀結婚致しましたに就て會員諸兄の多大の祝福を承ふし、加之、過日幹事氏より御祝儀品迄頂戴致し恐縮至極に存じて居ります。乍略儀此の紙面を借りて厚く御禮申上げます。今後ハ何卒宜敷御引立願上ます。(小川)

編輯子より

どうも原稿が集まらないので弱りました。尤も此れには私の怠慢も原因してゐるのですが、なかく多忙な仕事を持つて居りますので思ふ様に會の爲に働けないのが実情なのです。証券業と云ふものは、どんなに神経を使ふものか御想像願ひます。何卒旧年中の怠慢は御許し下さい。新春以降は可成順調にやりたいと思ひますから、諸兄にもどしどし原稿御送付あらん事切に、／＼お願ひ致します。

○ 嶄新なるカットを募集致します。
○ 會報編輯に就て御忠言を頂き度う存じます。